この物語は18歳未満の方が読んではいけません。
そもそも18歳未満は神社モドキ自体を閲覧することをお勧めしません。
第4話は思いっきり有害な記述が多いので特に注意してください。
JUNKMAN のポリシーとして具体的な警告はいたしませんが、読み進められる場合は自らの責任でそれなりの覚悟をしてお進みください。
なお、無断転載・翻訳の類いはお断り申し上げます。

ノモイの頸木・第4話
By JUNKMAN

＊＊＊＊＊

ユキはネオ・トキオ・メトロポリスに到着した。
市民たちが半狂乱になって逃げている。
その様子を悠々と上空から見おろす。
面白い。
高層ビルの一つに顔を近づけてみた。
地球人が屋上に集まって騒いでいる。
急に間近から見つめられて慌てている。
哀れになっちゃうほど小さい。
まるでゴミだね。
この極小の地球人たちに、ボクはどのように見えているのだろう？
山よりも巨大な超大巨人？
くくく
改めて心地よい優越感が沸き起こる。
この極小で無力なこびとたちが何億人も束になってかかってきたところで、まるでボクの敵ではない。
じゃあ、からかってみようか。

「・・・踏みつぶそうかなあ？どうしようかなあ？」

突然上空に超巨大な生足が振り上げられて、市民たちはパニックに陥った。
踏みつぶされる！
この大巨人に、虫けらのように踏みつぶされる！
治安を守るために軍が出動していたが、あの超巨大な生足に対して小さな兵士たちが対抗できる手段などあるはずもない。

「みんな、逃げられるかな？無理だよね。だって、キミたちはとっても小さくて惨めなこびとだからね。大巨人のボクから逃げようったって、それは無理だよね・・・くくく、じゃあ、踏み潰しちゃうよ❤」

ずずうううううううううん
無慈悲に振り降ろされたユキの生足は、ネオ・トキオ・メトロポリス繁華街の２～３ブロックをまとめて市民や兵士ごと葬り去った。

「あーはっは、愉快愉快。これもキミたちが先にボクに攻撃してきたからだよ。ボクは正当防衛で仕方なくキミたちを退治しているんだからね❤」

白々しく言い放つと、ユキはネオ・トキオ・メトロポリスで一際目立つ建築物に目を止めた。
ネオ・トキオ・セントラルビル。
この大都会を象徴するランドマークだ。
周囲から突き抜けて飛び出した超高層建築なので、このメトロポリスのどこからでもその偉容を仰ぐことができる。
すなわち、常にこのネオ・トキオ・メトロポリス 3000 万市民の注目の的なのだ。
そんな超高層巨大建築物が、今はなぜか矮小に見える。
比較対象になっているその隣の人物が巨大すぎるからだ。

「くくく、これがキミたち地球人ご自慢の超高層ビルなの？」

ユキは座り込むと、ネオ・トキオ・セントラルビルの最上階を指でつんつん突いてみせた。

「ボクにとっては小っちゃな玩具にしか見えないけどね。」

ユキの心の中で、何かが弾け飛んだ。
もはや勝利は揺るぎない。
この星をもうボクのもの。
だって、このこびとの星で、ボクは無敵の大巨人なのだ。
ほらほら、哀れなこびとども、もっとしっかりボクを見てごらん。
ボクの大きさを見てごらん。
ボクが何をしたって、キミたちに止めることはできないでしょ？

逆らうことなんて、できないでしょ？
悔しい？
ねえ、悔しいでしょ？
無力なこびとたちが自分を見上げる、畏れと、驚きと、恐怖と、悔しさと、諦めの入り混じった、熱い熱い視線を感じる。
ユキはこみ上げてくる優越感で胸がいっぱいになり、股間も熱くうずいてきた。
もうびしょびしょだ。

「・・・こんなもの、ボクには玩具にしか見えないんだから、本当の玩具にしてやるよ。」

もはや、秘めた自分の目的も隠しておく気がしなくなった。
淫靡な笑みを浮かべながら、ユキは言い放つ。

「そして次はキミたち地球人みんなが、ボクのえっちな玩具になるのさ・・・」

＊＊＊＊＊

ネオ・トキオ・セントラルビルの最上階ホールには、既に 200 人あまりの暗い目をした身なりの汚いうさんくささ満開の男たちが集結していた。
防衛軍長官はその前に立つと、一つ小さく咳払いをしてから演説を始めた。

「ああ、諸君、諸君は、え一と・・・なんだったけ、あのサイトの名前？」

「Jinja-modoki です。」

「そうそう、その Jinja-modoki という有害サイトに連日アクセスしていることが確認された市民である。間違いないかね？」

「・・・その通りです。」

うさんくさい男たちは素直に頷いた。
ぐらぐらぐら
そのとき強い地震が起こり、超高層建築ネオ・トキオ・セントラルビルの最上階は大きく揺れた。

「うわあ」

「慌てるな！」

防衛軍長官は一喝する。

「このネオ・トキオ・セントラルビルの防災対策は完璧だ。巨大少女に玩具にされたくらいではびくともしないレベルの耐震構造が施されている。」

「え？」

意外な言葉にうさんくさい男たちが色めき立った。

防衛軍長官はこの件についてそれ以上言及することなく、男たちに向かって本日の案件について切り出した。

「・・・私はもともと軍人である。かつて部下たちに『死んでこい』と命令したこともある。非常に辛いことではあったが、それが軍人の定めだと自らに言い聞かせてきた。しかし、軍人以外の市民を生命の危機に曝すようなことだけはしてこなかった。」

「・・・」

「だが・・・今日は、それを諸君にお願いしなければならない。」

防衛軍長官はいきなりその場に土下座した。

「頼む！お願いだ！諸君にしかできないんだ！この地球を守るため、一肌脱いではくれないだろうか！！！」

・・・
・・・
・・・
長官の言葉を聴いて、皆、呆けたように黙りこくってしまった。
いきなり『死を覚悟するほど危険な何か』を依頼されるらしい。
・・・
極度の緊張と沈黙を破って、シルクハットにフロックコート、アイマスクにカイゼル髭という、うさんくささの権化のようなルックスの紳士がつかつかと歩み寄り、土下座する防衛軍長官の肩を叩いた。

「・・・長官、頭を上げて下さい。」

「・・・」

「長官の要請は、しっかりと承りました。」

「！」

「私たちは確かに一般市民が眉をひそめる有害サイトに入り浸っているサイズフェチです。良識ある市民からは、やれ変態だ、アブノーマルだ、キモい、と罵られ、生身の女の子には全く相手にされず、一言でいえば、社会の最底辺の存在です。」

「・・・」

「しかし、なめないでいただきたい。そんな私たちサイズフェチだって、この地球を愛することなら誰にも負けるつもりはない。私たちが命を捧げることで大切な地球が救えるのならば、この命・・・喜んで差し出しましょう！！！」

「そうだ！！！」

「そうだ！！！」

「おお！！！」

「おお！！！」

うさんくさい男たちは、全員が拳を突き上げ、叫びだした。
防衛軍長官は両眼からぼろぼろと感涙をこぼした。

「みんな、ありがとう・・・ありがとう・・・」

ぐらぐらぐら
そのときまた、ネオ・トキオ・セントラルビルは大きな揺れに見舞われた。
不安そうなうさんくさサイズフェチ軍団を前に、防衛軍長官は速やかにいつのも戦闘モードに切り替わり、手早く指示した。

「時間がない。これからの計画について指示します。みんな、これを見てほしい。」

モニターにネオ・トキオ・セントラルビルの外部の映像が映し出された。

＊＊＊＊＊

ぱくり
・・・
・・・
ユキはネオ・トキオ・セントラルビルを銜えこんだ。
れろれろれろ
ちゅばっちゅばっ
れろれろ
ぐぷちゅ
れろれろ
舌を使って念入りにねぶり回す。
れろれろれろ
ちゅばっちゅばっ
ぐぷちゅ

「・・・これさ、キミたち地球人にとっては超高層ビルなんでしょ？くふふ、ボクからみると、ホントにちんぽみたいなんだけど。」

＊＊＊＊＊

サイズフェチ軍団の士気は異様に昂揚していた。
いま、自分たちがいるこのネオ・トキオ・セントラルビルは、半裸の超巨大美少女によってしゃぶられている。

その様子が屋外に設置された多数のカメラから実況中継され、ホールのスクリーンに 360° これでもかと映し出されたのだ。

「・・・先ほども少し言いかけたが、このネオ・トキオ・セントラルビルは、巨大な美少女型異星人の玩具にされようとしている。それも大人の玩具、すなわち、彼女の性欲を満たすための玩具だ。」

防衛軍長官は居並ぶサイズフェチたちを前に状況を説明し始める

「この状況を予知せずたまたまここに集まってもらった諸君だが、ここから先の行動は諸君に委ねる。諸君の本能に任せて、好きなように振る舞ってもらいたい。これについて、地球防衛軍は一切の強制も要請もしない。」

ここで防衛軍長官は、少し気まずそうに一つ咳をした。

「・・・ただし、その結果、諸君の生命は危機に曝されてしまうかもしれない。この点に関して、地球防衛軍が責任をとることはできな・・・」

しかしサイズフェチ軍団は、もはや長官の説明なんか聞いてはいなかった。
超巨大な美少女が、いまこの建物全体を銜え込んで舐めている。
自分たちは、いま彼女の口腔内にいるのだ。
確かに建物全体がぐらんぐらんと揺れ、季節外れに暖かくなり、ねっとりと湿ってきて、しかもうっすらと唾液の臭いまで漂ってきた。
スクリーンに映し出される画像と自らの五感の全てがシンクロした。
・・・
既に彼らの股間は爆発寸前である。
・・・
だが
・・・
・・・
まだ早い。
まだまだ早い。
本番はこれからだ。
彼ら全員に確信があった。
これから、文字通り、本番、が来る。
彼らの期待が否応にも高まる。
欲望を溜めに溜め込んで、その瞬間が来るのを待つ。
いまか。
いまか。
そして防衛軍長官は、配下の兵士たちに命じて、手際よく全員にティッシュボックスを配り始めた。

＊＊＊＊＊

もう十分に舐め尽くした。
この高層ビルとやらは全体がべっとり濡れている。
ついでにボクのまんこももうじゅぶじゅぶに濡れているよ。
頃合いだな。

この星の文明を犯してやるんだ。
こびとたちが誇りに思っているランドマークだって、ボクにとってはただの一本のちんぽでしかないことを見せつけてやるんだ。
そしてボクの前では地球人なんかまるで無力なこびとであることを思い知らせてやるんだ。
じゃあ
挿れよう。
ユキは中膝になって、一際高いネオ・トキオ・セントラルビルの屋上を自分の膣口にあてがい、一気に、腰を落とした。
ずぼっ

「あ、あああ」

冷たい無機質な棒が、ずんっ、と、真下から突き上げる。
子宮口まで串刺しだ。
予想していたより手強い相手みたい。
少し腰を浮かせて
また沈める
また浮かせて
また沈める
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ぐっちゅ
ぐっちゅ

「あはあああああ」

なんだこれ？
アリンコより小っちゃなこびとが建てた超高層ビル。
笑っちゃうような玩具サイズの超高層ビル。
でも、これって、ちんぽとしては超優秀じゃん！
予想以上に気持ちいい。
こんなちっぽけな超高層ビルなんて、締まりが自慢のボクのまんこで軽くねじり潰して、地球のこびとたちに思い知らせてやろうと思ってたのに・・・でも、悔しいくらいに強靭。
むしろぐいぐいボクに突き立ててくるって、どういうこと？

生意気！
・・・
うん
でも
気持ちイイ！

「あはあああああ」

ぐっちょ
ぐっちょ
ぐっちょ
ぐっちょ
ぐちょ
ぐちょ
ぐちょ
ぐちょ

「ああん、ちょっとお、これ、イイじゃん！キミたち地球人はちびすぎて、ボクのえっちの相手にはならないけど、このビルはちんぽとして最高だよ！キミたち、よくこんなものをボクのために勃てて、いや、建てておいてくれたね。ちょっと見直したよ！」

＊＊＊＊＊

一際激しい揺れの後、ホールの照明が消えた。
優れた耐震設計のために倒壊こそしないが、さすがに停電してしまったのだ。

「カメラとプロジェクターを非常用電源に切り替えろ！」

「はい！」

防衛軍長官の指示に従って、ただちに外部の様子を映し出すシステムは正常に復帰した。
これでよし。
しかし、その後も配下の防衛軍兵士たちは不安そうである。

「長官、この投影システムだけ復帰させて、それで良いのですか？」

「大丈夫だ。さっきも言ったが、この建物は頑強だ。手荒に玩具扱いされても倒壊することはない。」

「ですが、自動ドアもエレベーターも稼働していないんですが。」

「それでいい。これで、彼らをこのホールの中に閉じ込めたのは停電を引き起こした彼女だ、ということになる。」

「そ、そうですが・・・」

「後は、彼らの外の様子を心ゆくまで堪能させてやれば良いのだ。」

「うおおおおおおおおお！！！」

そのとき、ホールから大きなどよめきの声が上がった。
復帰した映像システムが、ネオ・トキオ・セントラルビルの真上に迫ったものすごい映像を提供してきたからである。

「うおおおおおおおおお！！！」

「・・・始まったな」

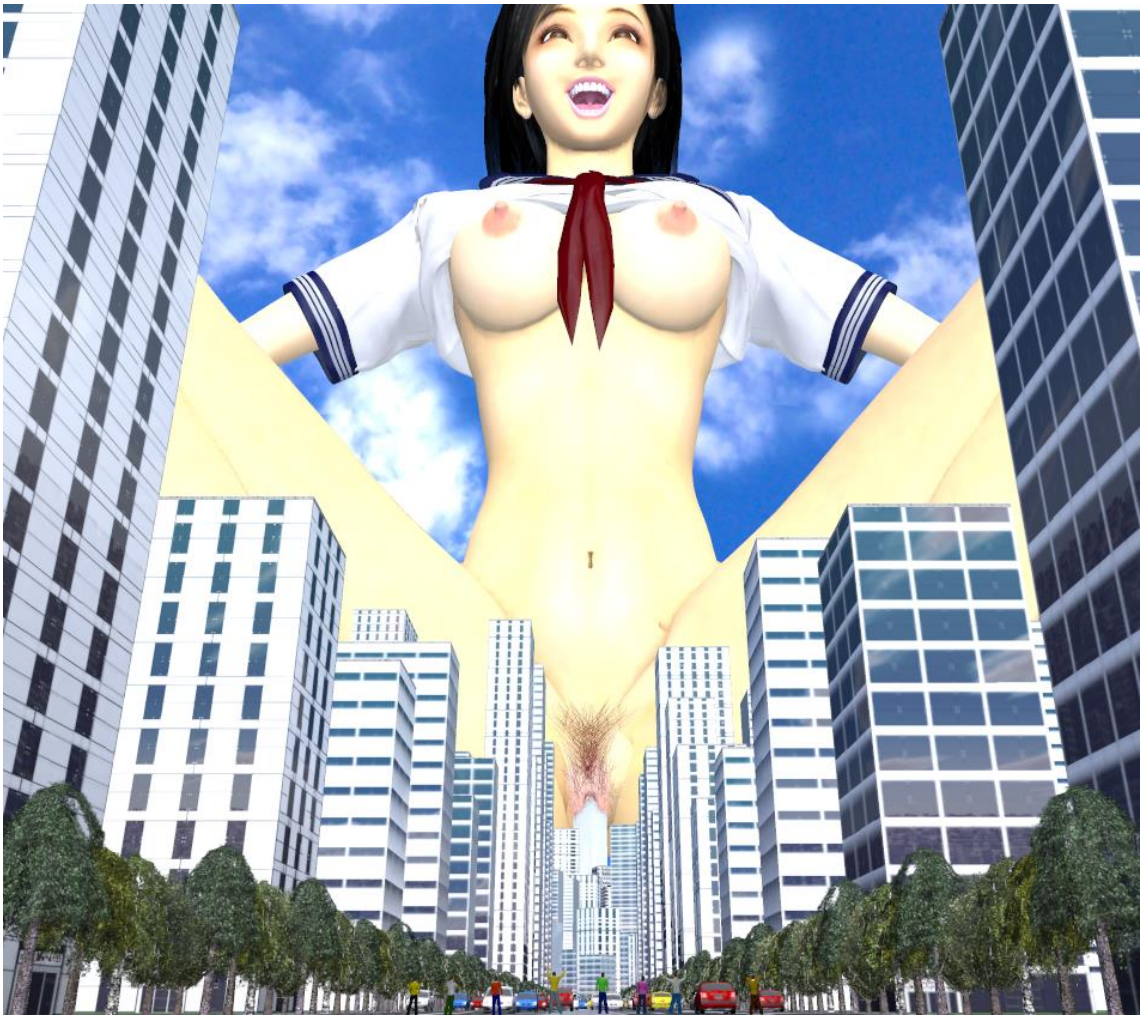
ホールの中は怒号絶叫飛び交う修羅場と化した。
ついに、本番、が始まったのだ。
相変わらず湿度は MAX に高いままだが、揺れまくるホールの温度は急上昇し、そして染み込んでくる匂いも変わった。
極限まで我慢していた彼らの股間は、事ここに至って大爆発！！！
誰もが目を充血させて、言葉にもならない言葉を発しながら、全循環血漿を股間に集中させる。
ホールの中はたちまちイカくさい臭いで充満された。

「うおおおおおおおおお！！！」

地球防衛軍兵士たちは慌ただしく駆け巡りながらティッシュボックスのお替わりを配り続けた。

＊＊＊＊＊

そのころ、ネオ・トキオ・メトロポリスの市民たちは、目の前に繰り広げられる信じられない光景に言葉を失っていた。
市民の誇り、地球人の誇り、ネオ・トキオ・メトロポリスのランドマークである超高層建築ネオ・トキオ・セントラルビルが、異星人の少女の膣内にずぶりと挿入されていく。
まるでそれがただのちんぽであるかのように犯されている。
地球人が、地球人の文明が、このたった一人の巨大な少女によって陵辱されているのだ。
その破廉恥な行為を、これ見よがしに見せつけている。



自分たちが玩具以下の惨めな存在に貶められる将来が、高らかに明示されていた。
市民たちは完全に心を折られ、見るに忍びない光景から目を背けつつ、ぎゅっと唇を噛みしめた。
ここまでは全くユキの思惑どおりだったのである。

＊＊＊＊＊

ところが、地球には、まだ心を折られていない人々がいた。
挿入されたネオ・トキオ・セントラルビルの内部に監禁された、例のサイズフェチ軍団である。
彼らは、この光景から目を背けるどころか、モニターに映し出される映像に血走った目でかぶりつき、全神経を集中させていた。
その視覚情報は聴覚・嗅覚・温痛覚・振動覚と一体化して莫大な煩悩エネルギーに変換され、彼らの股間に注ぎ込み、そして底知れぬマグマの大放出となっていった。

「長官！」

ティッシュボックスを配っていた若い兵士が、耐えきれなくなって防衛軍長官に直訴した。

「もう危険です。止めさせましょう！こんなことを続けていたら、彼らの体力が持ちません！

「・・・続けろ。」

「しかし長官！」

「そこまでにしておけ。」

上官が、若い兵士の手を引っ張って引き離した。

「しかし・・・」

「・・・この決断を下した長官自身がいちばん辛いはずだ。でも、地球のためにはこうするしかなかったのだ。見ろ！その期待に応え、全地球人の希望を担って、彼らはいま戦っている。自分の煩悩を全開にして、命も省みずに戦っている。この戦いは、彼らにしかできないことなんだ！尊いことじゃないか。それならば・・・我々も、彼らの闘志に敬意を表して、一緒に戦おうじゃないか！」

そう訴えかける上官の目には涙が浮かんでいた。
若い兵士は、雷に撃たれたようなショックを受けた。
自分の思慮の浅さを思い知らされた。
やがて、大きく肯くと、溢れる涙を片手で拭いながら、再びティッシュボックス配りに奔走し始めた。

＊＊＊＊＊

「・・・長官」

「・・・ああ、エリックか」

「如何ですか？」

「うむ・・・そろそろ、かな。」

「了解しました。では、コンタクトします。」

＊＊＊＊＊

ネオ・トキオ・セントラルビル内部でそんな熱い人間ドラマが繰り広げられているとはつゆ知らず、ユキはこれをただの一本のちんぽとして犯しまくっていた。

「あああああ、はあああああ！！！」

ぐっちょ
ぐっちょ
ぐっちょ
ぐっちょ

「あああああ、はあああああ、いいいいい、いくうううううううう！！！」

「・・・そこまで！」

「？」

急に声をかけられて、行為中のユキは慌てて腰を浮かせると振り返った。
超ミニスカで警帽・眼鏡の若い婦警さんが、ユキに向かって銃口を向けている。
ユキと同じくらいに超巨大な体躯、ということは、スンゲデッカ星警察の警察官だ。

「ユキ・シュライク・イッテラー18λJK、異星における違法行為取締規約に則って、現行犯で逮捕します。」

ユキは思いきり首を左右に振る。

「ちょっと待ってよ！わいせつは時代や社会によって変わってく流動的な概念だから、公然わいせつ罪は異星における違法行為取締規約の対象外のはずだわ！」

「・・・公然わいせつならな。」

いつの間にかチャン広報官が操縦するヘリコプターに乗り込んでいた防衛軍長官が答えた。

「我々がスンゲデッカ星に通報した罪状は『強姦』だ。」

「強姦？」

ユキは両手を広げて否定する。

「ふざけてるの？ボクがえっちしたのはこの高層ビルだよ。建物なんだよ。それのどこが

強姦になるっていうの？ただのオナニーでしょ？」

「ところがそのネオ・トキオ・セントラルビルの内情はこの通りだ。」

ヘリコプターから上空に映像が投影される。
ネオ・トキオ・セントラルビルの最上階ホールの情景だ。
200 人ほどのうさんくさい男たちが、からからに干からびたミイラ状態になって倒れている。
百戦錬磨の婦警さんも思わず顔を背けたくなるほどのむごたらしい惨状だった。

「・・・彼らはたまたまネオ・トキオ・セントラルビルの最上階ホールにいたサイズフェチというハンディを持つ可哀想な変態さんたちだ。この変態さんたちは、ネオ・トキオ・セントラルビルごと、あなたの膣内に挿入された。サイズフェチにとって、この状況はとても我慢のできるものではなかった。このためエンドレスに精液が貪り取られていった結果、彼らは極度の脱水ならびに低タンパク血症に陥り、循環が虚脱して、ついにこのようなミイラ状態になってしまったのだ。これはただの強姦ではく、強姦致死も適用され得る凶悪犯罪だ！」

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

ユキは狼狽する。

「そりゃあ、ボクは確かにこのビルをまんこに挿入したよ。でもそれだけだよ。その中で勝手にオナニーしていた人がいたって、ボクの知ったことじゃないよ！」

「・・・そう思いますか？」

防衛軍長官は冷静である。

「ならば、いま、誰か男性が嫌がる行きずりの女性を押し倒して中出ししたとしよう。これはスンゲデッカ星では強姦になりますか？」

「もちろん強姦罪が成立します。」

ミニスカ婦警が事務的に頷く。

「そのとき男性が『自分はただオナニーしただけだ！そのオナニーした場所が、たまたま行きずりの女性の膣の中だっただけだ！』と弁明したらどうですか？」

「そんな弁明は成立しませんね。」

「そうでしょう。」

防衛軍長官はにこりともせず、ユキに向きなおる。

「ならば膣の中に無理矢理押し込まれてれて、そこで射精させられた男性を、『オナニーしていた場所が、たまたま膣の中だった』と言い逃れすることはできますか？できないでしょ？彼らは自分の意に反して、あなたのためにあなたの膣内に挿入され、あなたのためにそこから脱出することも叶わず、

そして頼んでもいないあなたの振る舞いによって無理矢理興奮させられ、その結果、精液を貪り取られた。これは明らかに強姦です！」

「！」

それでもまだ何か言いたそうなユキを、ミニスカ婦警さんが片手で制した。

「そういうわけで、あなたを逮捕します。」

「え？」

「強姦では正当防衛も成り立たないわ。」

「ちょ、ちょっと待って下さいよ！」

「言い分はスンゲデッカ星の署で聴くので。」

「で、でも」

「・・・公務執行妨害、追加しとく？」

ずずううううん
ユキは諦めて両膝を付き、うなだれた。
その両手首に、ミニスカ婦警さんは慣れた手際で手錠をはめた。
がちゃり

＊＊＊＊＊

戦いは終わった。
地球は、地球連邦は、地球防衛軍は、またしても恐ろしい侵略者の魔の手から、この地球を守り抜いたのだ。

「・・・我が地球連邦は、いかなる侵略者にも、決して屈することはありません！」

テレビでは、ユキが手錠をはめられてスンゲデッカ星へ連行される映像をバックに、事務総長が拳を振り上げながら高らかに勝利宣言していた。
その立役者のであるはずの防衛軍長官とエリック・チャン広報官は、控室でまったりコーヒーを飲みながら、この放送を視ていた。

「・・・犠牲は大きかったな。」

ユキのまんこの中で散っていった勇敢なサイズフェチたちである。

「わたしは責任を取る。」

市民をこのような目に遭わせたことは決して許される行為ではない。
沈鬱な表情の防衛軍長官は、懐から辞表を取り出してみせた。
チャン広報官が素早くそれを奪い取る。

「何をするんだね！」

「それはこちらのセリフですよ、長官」

チャン広報官は人差し指を立ててちっちっちと横に振る。

「彼らにとっては夢のシチュエーションだったのです。羨んでいる人も多いことでしょう。それに、サイズフェチが単なるキモい変態さんではなく、地球にとって不可欠な存在であると全世界に知らしめることもできました。まさに『本懐を遂げる』という感じじゃないですか。」

「とはいってもだな・・・」

「こういうニュースも入りました。」

チャン広報官は手にしたタブレット端末を防衛軍長官に示した。

「このたびの事件で責任を感じたスンゲデッカ星政府が、腕利きのナースさん、というか、ヒーラーさんを雇って、地球に派遣してくださるそうです。」

「うーん、気持ちは有難いが、しかしどれだけ腕が良くても、あのからからのミイラ状態になった人々をヒールするのは難しいんじゃないか？」

「ところがこのヒーラーさんが一味違うんです。」

「ん？」

「なんでもあのカイゼル髭の怪しげな紳士のお知り合いだそうで、巨大で、綺麗な女性で、しかもサイズフェチへの造詣が深く、ぶっちゃけ『いやし』の力量は微妙ですが、サイズフェチのツボを突く『いやらし』の力には定評があるのだとか。」

「ほほう。ではそのナースというかヒーラーが、彼らの枕元でサイズフェチまる出しの『いやらし』を見せつけちゃったら・・・」

「彼らは底知れぬ煩悩の力を解放して勝手にゾンビの如く蘇ってくるに違いありません。」

「そうか・・・」

防衛軍長官もやっと晴れ晴れとした表情になった。
チャン広報官はにっこり笑うと、手にした防衛軍長官の辞表をびりびりと破いてしまった。

「あ！」

「ダメですよ長官。長官はこれからもこの地球にとって絶対に欠いてはならない人物です。責任をとるとかって、勝手に辞めてしまうことの方がよっぽど無責任なんですからね！」

「・・・」

防衛軍長官は苦笑いしながらコーヒーをすすり込んだ。
安心したチャン広報官は、余裕をもって振り返りモードに入る。

「それにしても危ない橋の連続でした。中でもいちばん不安に思っていたのはあの人物です。」

チャン広報官はテレビに大写しにされた事務総長を指さす。

「あの人って、信頼の置ける人なんですか？」

防衛軍長官はしっかり頷く。

「事務総長への絶対の信頼がなければ、この作戦を遂行しようなんて思わなかったよ。」

「ほんとですか？・・・いや、正直、僕は、事務総長があの超巨大淫乱娘のどえっちパフォーマンスを見て、興奮のあまりマジで『地球をあなたにあげます』って契約しちゃうんじゃないかって、心配でたまらなかったんですよ。」

「おやおや、キミとしたことが、それは情報収集不足だな。」

「へ？」

「事務総長が、あんな娘のパフォーマンスで取り乱すことはあり得ない。絶対にあり得ないのだ。」

きっぱり言い切る防衛軍長官を見て、チャン広報官は自らの不明を恥ずかしく思った。
事務総長なんて、時間があれば執務室でこっそり R-18 動画見ているただのエロ爺に違いないと決めつけていた。
だが、どうやらそれは見立て違いだったらしい。
ああ見えて自分を律する力を備えた高潔な人物だったのだな。
・・・
・・・
などと勝手に感動しているチャン広報官の肩を、防衛軍長官はぽんぽんと軽く叩いた。

「・・・事務総長が三次元の、しかも 12 歳以上の女の子に興奮するなんて、絶対にあり得ないことなんだよ。」

ノモイの頸木・終